

## 日本語点字資料の語種的特徴

### Lexical Characteristics of Japanese Braille

中野真樹 (国学院大学)

Nakano Maki(Kokugakuin University)

#### 要旨

現在、日本語文字表記システムとして、触読文字である点字と視読文字である墨字（すみじ）が平行してつかわれている。漢字かなまじり文を基本とする墨字にたいして点字は6点点字1字がほぼかな1字に相当するかな専用文でかかれる。そのため、しばしば「漢字をつかわないのでは漢語の同音異義語などの問題で文章の可読性に支障がでるのではないか」という疑問をきくことがある。仮にそれが事実であるとすれば点字使用者を対象読者としてかかれた点字文章は、漢語をへらして和語の比率がたかくなることが予測される。そこで、現代点字新聞『点字毎日』近代点字新聞『点字大阪毎日』について語種比率を調査したところ、各時代の墨字版新聞と語種比率がほとんど差がないことがあきらかになった。これにかんしては、かな専用文であっても文脈による理解のため、漢語の同音異義語は可読性に大きな影響をあたえていないことがすでに指摘されている。

#### 1. はじめに

日本語点字は、墨字日本語漢字かなまじり文とならんで日本語をかきあらわすための日本語文字表記システムである。明治期に考案されて以来つかわれつづけている。また表記についても、視覚により視読する墨字（すみじ）とはかなづかい等の面で一部ことなる部分があり、独立した歴史・文化をもつ文字体系である。とはいうものの、点字と墨字はまったく無関係ではなく、墨字でかかれた新聞や文学作品等がさかんに点字に翻字されている。そのための情報処理技術に関する研究もおこなわれており、特に漢字を使用しないため文節わかちがきをする日本語点字への翻字作業の補助として、形態素解析器が利用される場合もある。このように日本語点字は日本語情報処理の観点からの研究は数多くあるものの、日本語学研究はあまりなされていないといえる。

そこで、本研究ではかな専用文である日本語点字を日本語研究資料として用いることとし、日本語点字の語種について調査をおこなった。

#### 2. 日本語点字の表記上の特徴

日本語点字は、世界でもひろく普及している6点点字を使用しており、点字1字がかな1字にほぼ相当する。ただし、ひらがなとカタカナの区別はない。日本語点字による文章は基本的には漢字をもちいないかな専用文でかかれ、そのため独自の規範をもつ文節わかちがきをおこなう。また、かなづかいは「現代仮名遣い」とは一部ことなり、たとえば墨字では「は」「へ」と書字する助詞にかんしてはワ行の「わ」ア行の「え」に相当する点字かなでかく。そして和語・字音語の一部の語のウ列・オ列長音表記に長音符「ー」をもちいるなど、『現代仮名遣い』とくらべて表音性のたかいかなづかいである。このような表記の方針は日本語点字成立時からおおきな変更はなく、一貫してかな専用文・文節わかちが

きがおこなわれていることがあきらかとなっている<sup>1</sup>。

これにかんして、日本語点字かな専用文は、日本語墨字漢字かなまじり文とくらべて同音異義語や同訓異字などの問題から可読性や情報量の点においておとっているのではないかという仮説が想起・提唱される場合がある。またその仮説を検証もしないまま事実のこととして提示するような例もみうけられる。

たとえば日本語能力試験の点字受験に関する研究である秋元ら(2014)では、以下のようにかかわれている。

漢字と仮名を用いて書かれた文章を、表音文字である点字に訳すことによって、損なわれる情報がある。しかし、試験においては漢字を知らなくても文章を理解できるという側面もある。また、現在 JPLT 点字冊子試験では、点訳時に損なわれる情報に対して必要に応じて注釈を付加しているが、注釈によって情報量が増えることが回答に影響する可能性もあろう。

(秋元ら 2014:291)

ここで日本語能力試験に影響をおよぼすほどに「表音文字である点字に訳すことによって」「損なわれる情報がある」とのべるのであれば、実際にどのような情報がどれほど欠落しているかは明示する必要があるだろう。また、かな専用文でかかれた文章の可読性や情報量が、日本語能力試験の受験にどれほどの影響をおよぼすのか、検討する必要があるとおもわれる。

しかしながら、墨字漢字かなまじり文でかかれた文章が点字かな専用文に翻字される機会はおおく、「点訳者」とよばれる翻字者の育成もさかんである。翻字にさいしては「点訳注」などとよばれる語句の説明を付加することはあるが、それも最小限にとどめられている<sup>2</sup>。墨字漢字かなまじり文でかかれた文章を点字かな専用文になおす場合に、わずらわしさをかんじるほどに同音異義語にかんする点訳注が必要というのであれば、翻訳や翻案が必要となろう。しかし実際には墨字でかかれたかきことばをそのまま点字に翻字する方法が主流であり、さまざまな分野で墨字から点字への翻字文章が情報保障のために作成されている。

また、このような「かな専用文は漢字を使わないから同音異義語などの点で読解に困難が生じる」という説は、もっともらしく聞こえるが実際には言語学的には事実とはいえない「漢字幻想」であり、そのような説を検証もなしに採用する言説については、言語学をはなれて「日本語表記漢字不可結論」などといったイデオロギー上のたち位置から説明するべきであるという指摘が文字学や社会言語学の研究者からはなされている。そして、実際には日本語かな専用文が日本語漢字かなまじり文とくらべて可読性や情報量において読者に深刻な不利益をもたらすほどにすくないということは証明できないという主張もある。

たとえば、Unger(2004)では、「漢字をめぐる6つの迷信(Six Myths about Chinese Characters)

<sup>1</sup> 日本語点字の表記の歴史については、金子(2007)がくわしい。

<sup>2</sup> 点訳者育成のための入門書である当山(1998)では以下のようにのべられている。「点訳者挿入符は、文の流れを中断して説明を行なうものですから、その使用は必要最小限にとどめるべきです。同音異義語であっても前後の文脈から意味が判断できる場合は用いる必要はありませんし、用いる場合もできるだけ簡潔にしなければいけません」(当山:166)」

<sup>3)</sup> のひとつとして、「絶対不可欠の迷信(the Indispensability Myth)」をあげている。そのなかでは、このように述べられている。

日本語の漢語の同音語群の中には英語の群より多くの同音異義語がふくまれているものが多い。辞書やワープロの入力作業では、「コウセイ」に少なくとも2ダース(固有名詞を除く)の熟語が見られる。しかし、そのうちの10語だけが、通常の書き物でよく出会う。しかも、それらは「構成」「攻勢」「校正」「厚生」「恒星」「更生」と、まったく共通点がない。しかも、これらの語は、辞書以外では、まれにしか並べて使われることがないし、その頻度には違いがある。(略)日本語は音節数が比較的少ないので、必然的に同音語の数が異常に増えた、と繰り返し論じられてきているが、英語の同音語の数のほうがはるかに多いのである。

(アンガー・奥沢 2005:59)

次に、論文の一部をかな専用文でかくことをこころみるかどや(2012)を引用する。

たとえば、ささいなことがだ、漢字かなまじり文でかかっているものの、漢字使用を減らしている本稿程度のものですら、「よみにくい」とかんじている読者(あなた)がいるとすれば、「自分を守ってきた鎧」にしがみつき、かたくなに変化をこぼんでいる可能性がたかい。あるいわ、かりに この ぶんしょうが かんぜんな 「ひょーおん かな わかちがき」で かかっていたら どーだろーか。 にほんごが だいいちげんごで、 かつ ひらがな おしっているひとで あるならば、 こーゆー ひょーきの にほんごお よめない・りかひできない はずわなひ。 あるのわ、 よむこと・りかひすることお こぼむとゆー たいどだけである(よみにくさわ ほんの すこしの じっせんによつて なれること たやすく かいしよー できる)。

(かどや 2012:150)

かどや(2012)のかな専用文による引用部でも、漢語もおおくあらわれ、そのなかの一部の語についてはたとえば「じっせん(実践・実戦・実線)」、「かいしよー(解消・改称・快勝・甲斐性)」といった同音異義語が問題となりそうなものもふくまれている。しかしながら、それを「よめない・りかひできない はずわなひ」とのべられている。そして、よみにくさをかんじるのだとすれば、それは「なれ」の問題であるとしている。

また、これらを計量的にうらづける論文としては、現代日本語点字資料の語種の比率について調査した羽山(2014)がある。次章で、羽山(2014)を参照しつつ、日本語点字の語種の比率について検討していく。

### 3. かな専用文としての日本語点字資料にあらわれる語種について

#### 3. 1 現代日本語点字の語種的特徴

羽山(2014)は、「一般に、漢字を使用しないで日本語を書こうとすると、漢字に依存せ

<sup>3)</sup> Unger(2004:1-12)。日本語訳であるアンガー・奥村(2005)が存在するため、本予稿では日本語訳を引用する。

ず耳で聞いてもわかるような語選択が行なわれると考えられる」という仮説をあげ、点字新聞『点字毎日』<sup>4</sup>および墨字新聞『毎日新聞』の、2011年の一面記事のなかから、両者でほぼ同じ内容を取りあつかっているとかがえられる記事を「国内政治」「国外政治」「経済」「災害」「事件」という分野ごとに1つずつ抜き出して、そこにあらわれる語種の比較をおこなっている。

その結果を整理したものが表1である。点字の「わかちがき法」を基準に語を分割し、助詞助動詞をのぞいた自立語のうち、固有名詞以外について、のべ語数と異なり語数のなかの語種の割合を調査したものである。のべ語数、異なり語数それぞれについて残差分析をおこなった結果をあわせてしめた。その結果、点字か墨字かという文字種によって語種比率にはとくにおおきな差というものはみられず、どちらも新聞の語彙特徴をしめすように漢語の割合がおおくなっていることがわかった<sup>5</sup>。かな専用文であるからといって、点字新聞が漢字かなまじり文とくらべて漢語の使用をへらしているわけではないということが、この調査からうかがえる。

この調査は現代語における語彙調査であるが、『点字毎日』は1922(大正11)年5月に創刊された近代点字新聞『点字大阪毎日』をその前身としており、点字新聞の経年的調査も可能である<sup>6</sup>。また、墨字版新聞として同時期に『大阪毎日新聞』が発行されていた。

【表1 『点字毎日』『毎日新聞』(2011年発行)の語種比率】<sup>7</sup>

		のべ語数			ことなり語数		
		和語	漢語	その他	和語	漢語	その他
点字	国外政治	31.4	64.7	3.9	32.5	65.0	2.5
	災害	30.5	67.1	2.4	32.1	65.0	2.9
	事件	21.6	67.0	▲▲11.4	22.4	68.4	▲9.2
	国内政治	32.0	66.0	2.1	36.4	62.3	1.3
	経済	29.6	62.2	8.1	35.3	▼55.9	▲8.9
墨字	国外政治	26.8	68.6	4.6	27.8	69.1	3.1
	災害	34.9	63.9	1.2	32.1	66.0	1.9
	事件	▼17.9	76.4	5.6	21.3	72.5	6.3
	国内政治	19.6	▲79.4	0.9	22.7	▲76.0	1.3
	経済	30.7	63.3	5.9	32.7	62.4	1.2

\*▲ 5%水準で有意に多い ▼ 5%水準で有意に少ない

▲▲ 1%水準で有意に多い

近代雑誌文献にみられる語種比率は、漢語の比率がたかかったことが指摘されている<sup>8</sup>が、そ

<sup>4</sup> 「点字毎日」は「毎日新聞」の記事を点字に翻字したのではなく、独自の編集室を持ち点字使用者のためにかかれた新聞である。そのため、語や文体の選択にあたっては点字使用者の可読性の利便を考慮しているものとかがえられる。

<sup>5</sup> 新聞で漢語の比率がたかいことは、佐竹・岸本(1998)などで指摘されている。

<sup>6</sup> 毎日新聞社『点字毎日』(<http://www.mainichi.co.jp/corporate/tenji.html>)を参照

<sup>7</sup> 羽山(2014)表1および表2を整理したもの。

<sup>8</sup> 田中(2013:19-20)によると、明治前期の「明六雑誌コーパス」では漢語の比率がきわめ

れでは『点字大阪毎日』の漢語比率はどのようなものであったのか。羽山(2014)の調査方法をもとに、『点字大阪毎日』創刊号から約1ヶ月間に刊行された点字新聞の語種比率について調査し、同時期に刊行された墨字版『大阪毎日新聞』との比較をおこなった。

### 3. 2 近代日本語点字新聞の語種比率

近代日本語点字新聞『点字大阪毎日』は、1922(大正15)年5月11日に創刊された。それ以来、週1回毎週木曜日に刊行されており、全16ページからなる。内容は、墨字版の新聞と共通するような国内外の時事ニュースと、視覚障害者が関心をもつようなトピックに特化したニュースとに大別できる。また、連載小説として菊池寛作『恩讐の彼方に』が掲載されている<sup>9</sup>。これらのなかから、墨字版『大阪毎日』との比較にあたって語彙種をなるべく共通点のおおいものとするため、国内外の時事ニュースのみに調査対象をしぼった。また、ページ数の関係から一つ一つの記事の分量は墨字版の新聞記事と比べると少なくなっているため、調査する記事を選定せずに1922年5月に刊行された分の記事について、すべてを調査した。

墨字版『大阪毎日』については、『点字毎日』発行日の1面記事のなかから『点字大阪毎日』で採取した語数とほぼ同数となるまで記事単位のランダムサンプリングをおこなった。

調査結果を表2にしめす。

【表2 『点字大阪毎日』『大阪毎日』(1922年5月発行) 語種比率】

	のべ語数			ことなり語数		
	和語	漢語	その他	和語	漢語	その他
点字	50.9	48.0	0.9	45.0	54.5	1.4
墨字	51.5	48.0	0.4	41.0	59.5	0.7

ここから、現在の『点字毎日』および『毎日新聞』と比較すると漢語の比率がひくくなっている。また、「その他」に分類した外来語が非常にすくなくなっていた。このように、時代によって新聞の語種比率は変化していることがわかるが、一方、点字か墨字かという文字種による語種比率の差というものは、近代新聞でも現代新聞と同様にほとんどみられなかった。

### 4. おわりに

以上でみてきたように、現代点字新聞も、近代点字新聞も語種比率という面では、その時代の墨字新聞との間では差はほとんどみられなかった。従来「漢語の同音異義語のためかな専用文では可読性がおとるのではないか」というようないいかたで予測されていた、点字か墨字かという文字種による語種比率の差というものは観察できず、かな専用文でかかれた点字新聞でもある時代や新聞というメディアの特徴があらわれる結果となった。今後は、範囲をひろげて各時代の点字新聞や、『毎日新聞』以外の墨字新聞についてもさらに

---

てたかく、明治中期から大幅に減少していることがあきらかにされておりその後徐々に減少していくものの、大正期の「太陽コーパス」においても、現在よりも漢語の比率は高くなっている。

<sup>9</sup> 1919(大正8)年に発表された時代小説。

詳細に調査していく必要がある。

また、これらの結果をうけて、「かな専用文で漢語をもちいてもなにも問題がない」という結論をみちびくわけにはいかない。漢字に依存した漢字かなまじり文を「日本語」の基準とするのであれば、点字使用者などのかな専用文を使用するひとにとっては漢語が日本語文章読解や文章発信の障害となる場合があることは、あべ(2002)でのべられている。

今後、墨字をおもに使用する研究者であっても、自分のかいた学术论文やエッセイなどが点字などのかな専用文に翻字されてよまれる場合を想定し、その場合に漢語がどのように文章読解に作用するのか検討する必要もある。

しかしながら、検証もしないまま「かな専用文では漢語の同音異義語を区別できないので可読性におとっている」などとかかるしくいうことは、点字使用者などのかな専用文を使用して生活しているひとびとを不必要におびやかす、偏見を助長してしまう結果にもなりかねないことについても、とくにことばについての発言に一定の影響をもつ日本語研究者や日本語教師、国語教師は留意するべきである。

#### 謝辞

今回の予稿執筆にさいして情報提供および助言をしてくださった羽山慎亮氏に感謝いたします。また、調査の便宜をはかってくださった筑波大学附属視覚特別支援学校資料室に感謝いたします。

#### 参考文献

- 秋元美晴、河住有希子、藤田恵(2014)「点字使用者の日本語学習に関する調査—日本語能力試験点字冊子試験受験者の日本語学習—」『恵泉女学園大学紀要』26 pp.283-294
- あべ・やすし(2002)「漢字という障害」『社会言語学』2 pp.37-55
- アンガー・J・マーシャル、奥村睦世/訳(2005)「漢字をめぐる6つの迷信」『社会言語学』5 pp.53-62
- かどや・ひでのり(2012)「識字／情報のユニバーサルデザインという構想—識字・言語権・障害学」『ことばと社会』14 pp.141-159
- 金子昭責任編(2007)『資料に見る点字表記法の変遷—慶応から平成まで』日本点字委員会
- 佐竹秀雄、岸本千秋(1998)「新聞第一面の語彙 1997年の新聞3紙を資料として」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』10 pp.5-20
- 田中牧郎(2013)『『明六雑誌コーパス』『太陽コーパス』から見る近代語彙』『国語研プロジェクトレビュー』14-1 pp.18-27
- 当山拓(2002)『改訂版 点字・点訳入門』産学社
- 羽山慎亮(2014)「点字新聞の語彙的特徴」『社会言語学』14(未刊・掲載予定)
- Unger, J. Marshall(2004) "Ideogram Chinese Characters and the Myth of Disembodied Meaning" University of Hawai'i Press